

近代俳句の授業実践録

――私の句――として握らせるには――

星野 真人

Masato HOSHINO

1 実施日時

平成22年2月24日（水）三時間目

2 対象、及び、生徒の実態

一学年1組42名（男子19名、女子23名）。一年間の、春夏秋を越えて冬を迎え、特に秋の文化祭や合唱コンクールを経てたどりついた時機である。出発当初はややもすると自立心に乏しく、集団内で少なからず問題も抱えていたクラスであったが、文化祭（演劇）への取り組みを機に成長し困難を乗り越え学年優勝も得て自信をつけた。更に初冬の合唱コンクールに向けては、教員に極力頼らず自分でどこまでできるかを試し、結果、準優勝であった。三学期は勉学に励み、穏やかに毎日を送っている。教科担任Ⅱクラス担任の、

年度で最後の授業が本時である。教授者と生徒の信頼関係は良くも悪くも密、双方意気込みも大きいと申し上げてよろしいかと思う。なお、平均学力の高いクラスで、実力考査では国語と英語の成績が特に優れている。

3 授業形態

本館4階普通教室にて。予め編成した7人×6グループ（男女混合）で机を固めて着席した状態で実施。

4 実施内容について

A 単元のねらいと指導時間の構成

『近現代の詩歌（短歌と俳句）』の単元（東京書籍「精選国語総

合)。全八時間を予定。

俳句の学習におけるねらいは、

① 各俳句の情景や心情を読み取り、表現方法と効果を理解して、より深く味わう鑑賞力を養うこと。

② 季語、切れ字など、俳句独特の表現を理解し、伝統的な定型詩としての俳句の言葉の働きを通して感性や想像力を磨くこと。

短歌では、与謝野晶子・石川啄木・北原白秋・齋藤茂吉の四歌人について、一作品ずつを扱った。俳句では、正岡子規・高浜虚子・そして種田山頭火の作品をやはり一句ずつ扱い、あわせて各作者の紹介と、作風、さらに歌史・句史上の位置をおさえる。生徒に各作品・作者について調べさせ発表させる展開も考えられたが、年度末の時間がない中で、安易にインターネット等から情報を流用して済ます害も懸念され、教師主導の授業とした。

ただし、作品と率直に向き合う中で生じる、生徒の豊かな読みの幅を、極力生かしてゆきたい。生徒側からすれば、詩歌の学習は、概して不健全な受身型に終始することが多い。教師から一方的な「解釈」を押し付けられるだけ、とか。または、「調べて発表」という自主研究のような形をとったとしても、活動の中身は、前述のインターネットからの流用や図書館の研究書の解釈の丸写し、とか。作者の経歴を調べ、それに則った解釈をする、というのも、時には、作品の自由な鑑賞を妨げることになる、と私は考える。芸術作品は、生み出された後には、それ自体で独立した価値を帯びるものだから

である。ただ、今回扱う山頭火の句は、山頭火の人生を離れてはその魅力を十分には味わい得まい。このあたりの按配が難しいところである。

③ 作品それ自体に、自分自身でしっかりと向き合い、自分なりの解釈を試みわかってゆくとともに、俳人の数奇な人生や作句の背景、作品に込められた思いを興味を持って学び、最終的に「私の句」として握ること。

このようなねらいを加え、授業を行ってゆきたい。

B 補助教材

a 予習用ワークシート（B5横）

作品について、自分なりの解釈を試みる。また、作品が詠まれた情景を想像し、色鉛筆等を用いて指定枠内にイラストを描いてくる。

※なお、この予習の際、作品について語彙や語法を辞典等で調べるのは良いが、作者や作品の解釈について踏み込んで調べてくるのは厳禁とした。

b 傑作イラスト紹介プリント（B4縦）

クラス内での秀逸な予習イラストを紹介。

※aの予習プリントを当該授業の前日までに回収して教員で眼を通し、秀逸なイラストを選んで印刷し、授業の初めに紹介する形をとった。また、ユニークな解釈についても口頭で披露した。これをしてからだど、生徒のモチベーションも上がり、グループの分かち合いに入っていきやすい。

まとめ (7分)	展開 (40分)	導入 (3分)	5 本時の計画
感想を綴らせる。	<p>1、各グループから、句についての秀逸な解釈を発表させる。</p> <p>2、語句、文法を正しく把握しながら、最低限の妥当性のある解釈を提示する。</p> <p>3、解釈に際して、踏み込むべき箇所について、発問する。</p> <p>4、山頭火について、プリントを使って、紹介する。どういう境遇で作句されたか、さらに俳人としての位置も確認。</p>	<p>本時の目標を確認する。</p>	指導内容
七人の歌人俳人と、その作品について、印象に残ったものを選び、感想を綴る。	<p>1、各グループのリーダーが、グループ内で最も秀逸と思われる句の解釈を発表する。</p> <p>2、ノートに板書をしっかりと記してゆく。</p> <p>3、発問に対して、熟考し、意見を述べる。また、級友の意見を聞き取る。</p> <p>4、プリントにペンでラインを引きながら教員の説明を受ける。</p>	<p>1、グループ単位での着席。</p> <p>2、教科書、ノートを準備する。</p>	学習活動
感じたことを言葉に綴り、整理をさせる。生徒個々の人生と詩人の生きざま、作品の力をぶつけ合わせダイナミズムを实らせるのがねらい。	<p>・出欠席の確認。</p> <p>・教材準備、グループ着席を確認。</p> <p>・※前時にグループ内の話し合いを済ませてある。</p> <p>・誤読でなければ、可能な限り許容してゆく。</p> <p>・テストも近い。「なんでもよい」解釈ではなく、妥当性のある解釈は必要だということを強調。</p> <p>・読解を深めるためのポイント。時間をかけて扱い、しっかりと理解させたい。</p> <p>・自由律俳句であり、前二句(子規・虚子)との差異、特殊性をつかませたい。</p>	指導上の留意点	

- c 山頭火紹介プリント (B4横、両面)
「新潮日本文学アルバム 種田山頭火」(新潮社)等を参考にし、作成した。
- d 山頭火の句の紹介プリント (B5横)
「草木塔 山頭火の本1」(春陽堂)より、教授者の任意で十数句を抜粋した。
- C 本時の目標
「うしろすがたのしぐれてゆくか」(種田山頭火、自由律俳句)の
- 句の解釈と、山頭火の生涯及び俳人としての位置を学ぶ。作者からきりはなれた作品独自の鑑賞を尊びつつ、その波乱の生涯から生み出された作句の原点を理解させる。最終的には生徒各々が該当の句を「私の句」として握れるようなどころまでもってゆきたい。二時間連続の授業で、前半一時間では、予習イラストや解釈の紹介後、グループ内で解釈や作句の状況について話し合いをさせた。公開授業に設定した後半一時間は、各グループからの話し合いの報告と、教授者からの模範的解釈及び作者や作句の背景の紹介である。

6 実際の展開

- ① 二時間連続の授業で、さらに参観の教員が多数集まるということ、良い意味で生徒の集中力、興奮の度が高まった。
- ② 各グループのリーダーから、個性的な解釈の数々が報告され、クラスが沸いた場面もあった。「男女二人の別離の場面であり、一方が他方の涙に暮れた後姿を見守っている」風の解釈をしたグループが2、3あった。教授者としては、全員に「聴く姿勢」の指導を徹底すること、リーダーには「発表力」を意識すること、の二つを重んじた。すなわち、聴く側は、「発表者の話を聴きたくて待ち焦がれている」くらいの応援エネルギーを送ること。話す側には、「クラス全員の顔をしっかりと見て、話したいことの核心を興味を持って分かってもらえるように、皆をひきつけながら」語ること。無論、こちらは、発表者の声が小さければスピーカー機能を果たし、素敵なことを話したの言葉が足りなければ確認の質問を浴びせてもっと引き伸ばして話をさせる、などの対応をした。さすがに年度末、生徒は思いのほか成長していて、聴き手を沸かせながら伝えたいことをしっかりと伝え、またそれを楽しみながら聴きいれる態度が頼もしかった。
- ③ 解釈の模範例については、教授者側から、板書を用いて努めて明確に授業を行い、しっかりとノートをとるように指示した。「自由律」であること、「うしろすがたのしぐれてゆくか」中、「の」（格助詞、主格）、「か」（終助詞、詠嘆）、「しぐれ（る）」が『時雨に濡れる』『わびしくうらぶれた気持ちになる』の二つの意を含む掛詞に読める、「しぐる」は季語ともとれるが自由律でありそう限定する必要は無い、等の教示をした。語法的な面では、生徒は古文学習で慣れており、理解が早い模様。「しぐれ」については、発問した。掛詞的解釈に、自身の解釈との差を感じ、眼を開かれたという反応があったように感じる。
- ④ 二人でいた時の句、というのが、生徒側から出た読み。山頭火はこれをひとりぼっちの旅で詠んでいる。そこは作句の際の現実であったはずであるので示した。こども、生徒の驚きを誘った箇所。
- ⑤ 山頭火について、教授者側で作成したプリントを使用。「生涯」「連作」「写真」を掲載し、山頭火の人生と作句を紹介した。不遇な生い立ち、特に父の遊蕩と母の自殺、実家を継ぐが破綻させ妻子に離別され出家して全国を行脚しながらひとりぼっちで作句を続けていたこと、「コロリ往生」を遂げたこと等を写真を交え語った。ここについては教授側として入念に予習をした。
- ⑥ 授業前夜、教材研究をしていて強く伝わってきたこと。それは、山頭火の「人恋しさ」である。山頭火は晩年に生涯の全句を収めた『草木塔』を出しているが、巻頭には十歳の頃井戸に投身自殺をして果てた母への献辞がある。本句集の存在を紹介し、収められた人恋しい句の数々を抜粋しプリントに打ち、献辞を口頭で紹介して、授業の締めくくりとした。ここは、教授

者個人の解釈による誘導と批判されてもしかたのないところである。甘んじて批判をお受けしたい。

※『草木塔』より抜粋して紹介したもの

献辞 若うして死をいそぎたまへる

母上の霊前に

本書を供えまつる

まつすぐな道でさみしい

しぐるるや死なないでゐる

どうしようもないわたしが歩いてゐる

あの雲がおとした雨にぬれてゐる

まつたく雲がない笠をぬぎ

酔うてこほろぎと寝て居たよ

ほろりとぬけた歯ではある

笠へぼつとり椿だつた

けふもいちにち誰も来なかつたほうたる

あなたを待つてゐる火のように燃える

やつぱり一人はさみしい枯草

咳がやまない背中をたたく手がない

霜しろくころりと死んでゐる

どこでも死ねるからだで春風

a 7 ご参観頂いた本校教員からの反応

時間割変更の配慮がなく、空き時間の教員しか参観に足を運べ

なかったという状況の中で、管理職をはじめ講師の方々まで、二十人弱のご参観を頂き、教室のバックサイドは満席であった。大変に嬉しい限りである。

b 次のようなお声を頂いた。「山頭火の人生や句の魅力が味わえた、お疲れ様でした。修学旅行で行く山口小郡駅傍に銅像がある」(校長、教頭)「生徒もよく発言し、関心が高かったようです」(他教科専任、講師)「発問し、発言をよく受け止めて次へつなげ、解説も懐が深く、短時間だが味わいが深かった」(国語科専任、講師)。概してお褒めのお言葉をかけて頂いたが、「年度末で時間もきついと思うが、もう少しゆっくり生徒同士が感じたことを伝え合えたなら良かったのではないか」(他教科専任)とのご意見も承った。

c 「生徒の発言をよく拾っていたと思う。小さな声、拙い発言に、ことさら耳を傾け、スピーカーというか、まとめて繰り返す形で、他の生徒にフィードバックし、コンセンサスを得て、授業を展開していた」と、ある国語の専任の先生から評価して頂いた。心掛けていたポイントであり、励みになった。

8 実施者の振り返りと課題

まず、年度末の時間が限られた中での実施で、本来ならばもっとゆとりのある設定が好ましかったはずである。

テスト直前ではあったが、概して生徒のモチベーションは高かった。年間を通じて、反応のよい、好奇心旺盛で活発なクラスであつ

だが、今回は特にクラス全体を学習に対する前向きなムードが覆っていた。年度末の「国語総合」最後の、担任ラストの公開授業という味付けも功を奏したろうが、なによりも、単元で扱った歌人俳人とその作品、とりわけ山頭火の魅力が、生徒を生き生きとさせたのだろう。グループ討論、発表、反応、どれをとっても良質な展開が実現したと思われる。

反省は、最後に感想や意見をまとめ述べ合わせる時間をとれなかったことである。やはりとれるのならもう少しゆとりをとり、作者の生きざまや他の句に触れ感じたことを、生徒相互で豊かに交換し合える機会を作れたかった。

9 生徒の反応

時間の乏しい中であつたが、「山頭火という人がいること、山頭火の感じのこした思いに切なくなつた」「変わった句だが、そのために余計印象に残つた」「他の人たちもよかつた(子規・虚子)けど、なんかぐつときた」等があつた。真摯に己の生を生き、作句に全力投入した俳人たちの思いが少なからず伝わって、生徒各々の自己洞察に資するものとなつてほしい。

10 今後の展望

他大志向の受験への流れを念頭に置きながらも、高校国語科としての理念を貫きつつ、文学教材を存分に扱いながら、生徒各々の生き方なり方を大事に育んでゆきたい。

〈参考文献〉

- ・「新潮日本文学アルバム 種田山頭火」(新潮社 一九九三)
- ・「新訂俳句シリーズ人と作品7 種田山頭火」(松井俊彦著 桜楓社 昭55)
- ・「草木塔 山頭火の本1」(春陽堂 昭54)
- ・「あの山越えて 行乞記一 山頭火の本2」(春陽堂 昭54)
- ・「死を前にして歩く 行乞記二 山頭火の本3」(春陽堂 昭54)
- ・「寂しければ 書簡集 山頭火の本14」(春陽堂 昭55)
- ・「山頭火 研究と資料 山頭火の本別冊1」(春陽堂 昭55)

